

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 関 博紀

本研究は建築計画学と生態心理学の両者の知見を用いて、建物の一連の過程を環境と関係づけて検討することを目的としている。まず多数の戸建て住宅をケース・スタディして、それらを記述する生態学的な単位を抽出し、次に一住宅の設計過程を事例分析している。全体は5章からなる。

第1章は従来の建築研究を展望して、多くが概念的であり、建築が背景とする多次元の具体性が軽視されているとしている。その上で建築の研究には、企画から、設計、施工、住居者による改変までを一体的に把握する観点が必要であり、建築のあらゆる局面を行為的に把握する生態学的な分析単位が求められているとしている。生態学的単位を用いた試みとして、アレグザンダーのパタン・ランゲージや、ハイデッガーを引き継いだインゴルドの *Dwelling Perspective* を挙げている。

第2章は方法論を述べている。設計の行為的側面を「建築行為」と名付け、その記述枠組みとして、ギブソンの生態学的アプローチから、媒質(空気)、物質とを分ける面(Surface)のレベルを導入している。面は物質の媒質への露出面であり、人が行為する場所であり、建築行為は面の配置(Layout)に具現するとしている。面と縁による生態幾何学は、建築学の領域での「建築空間の仕切(Building Element)」などに関連するとしている。

第3章では、1950年から2003年の国内建設、217の住宅を図面と実地で分析し、面の配置を19パターンに分類している。それは、6種の部材表面自体の性質(曲り、丸、素材、透明、穴、細長)、9種の部材同士の配置(平行、斜め、鈍角、鋭角、直角、はみ出し、積層、段、高さ)、その他4種(開き、大小、棒、繰り返し)からなる。パタンの検討は、わが国の住宅建築が、直線的に囲まれ、上下階がズレ、隅の一部が伸びて境界が曖昧になっているなどの傾向を一致して持つことを明らかにしたとしている。次いで面のパターン特徴を「囲み型」と名付け分析している。囲み型は、内外を結びつける「開放性」、内部を囲い込む「閉鎖性」、場所を結びつける「連続性」、場所を細分化する「分節性」、移動方向を与える「方向性」の5つに分類されている。各型には複合と置き換え可能性を持つダイナミックスがあり、設計の過程を記述できる可能性があるとしている。

第4章では、2008年に10年の設計経験者によって、一月間進行した都市部の住宅設計過程を、図面10事例の変遷、打合せ全資料、複数回のインタビューから検討している。図面は、施主、敷地、構造からの諸制約、設計者のアイデア、全体の整合性などによって更新されたが、

このプラン変更を「操作」とよび、操作をさらに「出現」と「消失」、「分岐」、「復帰」などに下位分類している。操作の多層性から設計過程の変遷(発達)を分析し、一操作が他の操作を引きこむ設計行為内在的な自律的操作連動のあることを示している。この事例では操作の複合から、複数の時間スケールを多重化したダイナミカルな経緯から、一種の設計コンセプト、つまり統一的な建築行為理解のための枠組み(「キノコ性」とよばれた)が創発したとしている。

第5章の総括的議論では、まず建築行為が内外の各レベルで環境と結びついていたことを確認し、創発した「設計コンセプト」が設計過程の全体性と、設計を動機付け制約した物的具体性を同時に示すものであり、「設計意図」とよべるような特徴を備えていたとされている。それを建築行為における生態学的な資源と見なす可能性を論じている。最後に規模や時間的スケールの異なる多様な環境改変行為をも対象とする生態建築論の必要性が課題であるとしている。

審査会ではまず本論文が膨大な図面資料の精緻な分析と読み込みを行った成果であること、分析の結果も独自の工夫された概念図として示されていたこと、つまり論文の土台が分厚い建築的資料に立脚し、それらの情報量を担保した構成になっていた点を高く評価した。ギブソンの面という生態学的な単位で、建築行為の全過程を記述しようとした試みの独自性、また建築設計過程を面の変遷による発達として検討した試みは、今後、この種の研究に資すること大であると評価した。

審査会は本論文の問題点、限界についても議論した。論が面の組み合わせレベルにとどまり、複合したレイアウトレベルの発見が不十分であるという指摘、また建築学が課題とする「ボリュームの強さ」のようなことの扱いの不十分さなどの諸点が指摘された。ただしこれらの課題は、今後、この種の研究をさらに進めることで克服される方向性が論文に示されていることを認め、本審査会は、本論文が博士(学際情報学)の学位に相当するものと判断する。